

アメリカロースクール協会の バンクーバー会議

弁護士
佐藤 崇文

1. 2006年6月10日～14日、カナダのバンクーバーにおいて、アメリカロースクール協会 (Association of American Law Schools. 略してAALS) 主催の会議が「ロースクール教師のための新機軸：意識的に教える」とのタイトルで開催された⁽¹⁾。アメリカロースクール協会はアメリカ合衆国内の168のロースクールで構成されており、毎年1回の総会のほかに、シンポジウムやセミナーを随時開催している。今回の会議には全米から約150名の教授が出席したが、日本からの参加者は残念ながら私一人であった。バンクーバーは、緯度の上では、北海道稚内より北に位置しているが、海流の関係でおだやかな気候である。そこで休暇を兼ねて会議に出席する人も多く、ノーネクタイ・ジーンズ姿も多い。だが会議の中身及び出席者の発言内容は非常に真面目であった。講演などに熱心に聞き入り、発言も活発であった。会議のタイトルから分かるとおり、ロースクールにおける日頃の教え方をいかに工夫して改善向上するべきか、具体的にどうすべきかを議論することが会議のテーマであった。
2. 4日間で様々な講演・発表・議論が行われたが、進め方は各講演及び

(1) 会議の正式なタイトルは、「New Ideas for Law School Teachers: Teaching Intentionally」であり、「ロースクール教師のための新機軸：意識的に教える」と訳した。

発表の間に20名程度のグループに分かれてディスカッションを繰り返してゆくスタイルであった。講演のうち、興味深かったものを3つ挙げてみる。

（1）創造的思考について

コロラド州デンバー大学高等教育研究部門のデービス教授（Professor James R. Davis）は、初日の講演で、動物の行動心理学について説明し、また人間の脳の記憶のメカニズムから説き起こして、「今、自分は何を教えているのか」「その目的は何か」「目的を達成するために良い手段を選択しているのか」を常に意識することの大切さを強調した⁽²⁾。そしてロースクールの大きな目標の一つは、学生に創造的・批判的思考を身に付けさせることであるが、創造的思考を単に他人と違う独自の考え方と勘違いしている学生及び教授がいる。創造的思考とは、単にユニークな考え方をいうのではなく、「なるほどそういう考え方もあるのかと周囲の人達を納得させる程度に所与の事実に適合した考え方」をいうと、具体例を用いながら分かりやすく説明した。

このように教育学の専門家がロースクールの教授に対し教授法について助言指導することは、もっと日本で普及して良いだろう。

（2）学生の授業評価アンケートについて

デンバー大学のアーサー・ベスト教授（Professor Arthur Best）は、このロースクールも学期毎に学生に授業評価アンケートを記載させているが、「瑣末な事項や検証できない事項について無駄な質問がなされて

（2） Professor James R. Davis は教育法に関して数冊の本を書いている。そのうち「Better Teaching, More Learning: Strategies for Success in Postsecondary Settings」(ORYX PRESS 1933) の47ページに、「Effective teachers aren't afraid to come into a room and totally rearrange it.」と述べて、現状に甘んじやすい傾向に対して警鐘を鳴らしている。

いる。何のために質問をしているのかを常に意識しながら、アンケート項目を真剣に検討ないし改正する必要がある。またアンケートの目的が教授の昇進の是非を決めるためか、それとも講義の質を高めるためなのかを十分意識して、その目的に合致した具体的質問をすべきある。現在の内容のアンケート結果は参考資料にはなるが、過大評価は危険である。ちなみにこの度の会議で集計した授業評価アンケートの質問項目数は、少ないもので6、多いものは44であり、平均は19である。」と述べた。

ちなみに私も、広島大学ロースクールの授業評価アンケートを英訳して提出したが、質問項目は17と平均的な数であった。

(3) 学ぶことの楽しさについて

ニューヨーク大学ロースクールのデーリック・ベル教授 (Professor Derrick A. Bell, JR. 1930 ~) は、若い頃マーティン・ルーサー・キング牧師 (1929 ~ 1968) の公民権運動に従事した黒人の教授である。講演の初めに、のどかと言うべきか、自由と言うべきか、アメージンググレースを歌って講演を始められた。ベル教授は、「ロースクールの目的は、法律を学ぶことの楽しさを学生に教えることにある。法律の解釈を通じて自己を表現することの楽しさ、また既存の概念や利益に挑戦してそれらを変えてゆくことの喜びを教えなければならない。一般の人達に比べて、弁護士は依頼者との間のストレスのためアルコール中毒になったり、あるいは離婚したり、自殺する者が統計上多い。それは弁護士としての仕事に喜びと楽しみを見出していないからである。」「教室において教師みずからがスポットライトを浴びることを目指すのではなく、学生を主役として学生の持てる力を引き出し、教師は脇役に回る謙遜さが必要である。」と力説した。

ベル教授は、公民権運動の後ハーバード大学ロースクールの教授として招聘されたが、その後同ロースクールが黒人や少数民族出身者を教授

に登用しない政策を取ったことに抗議して、同ロースクールを辞してニューヨーク大学（NYU）ロースクールに移り、現在に至っている。

3. 少人数グループディスカッション

私の参加した少人数グループディスカッションでは、ソクラテスマソッドの是非が話題になった。学生に質問して学生の考える力を養おうとするソクラテスマソッドは理想的教授法のように日本で言われることがあるが、必ずしもそうではない。参加者の多くの意見は、「ソクラテスマソッドは質問を受けた学生にとってはかなり有益であるが、残りの学生にとっては必ずしもそうではない。学生の能力が一律ではないこと、時間の限られていることを考慮すると、常にソクラテスマソッドが良いとは限らない。」「他の教授法と同じくソクラテスマソッドも万能ではなく、要は使い次第である。大切なことは、学生の学習意欲をいかに引き出し、また限られた時間で効率的な教え方をしていくかにある。」「そのためにはソクラテスマソッドの他に、講義形式、講義直後の質問の受付、オフィスアワー、掲示板、少人数のグループディスカッションなどを適宜使用すべきである。」であった。

私の参加したグループの座長はアメリカン大学ロースクールのチャブキン教授（Professor David F. Chavkin）であったが、同教授は「ソクラテスマソッドは1年次の学生を萎縮させる弊害が大きいので、自分は使用しない。」と明言した⁽³⁾。

アメリカは広いので、つくづく多様な意見があると実感した。

(3) Professor David F. Chavkin は、リーガルクリニックについて造詣が深く、著書として「Clinical Legal Education」（Anderson Publishing Co. 2002）がある。同書の第4章（25ページ～37ページ）は、リーガルクリニックにおいて学生が直面する身近な倫理問題を11例挙げており、大変参考になる。

4. ところで、アメリカロースクール協会は、新任教師のためにもワークショップを毎年一回開催しているが⁽⁴⁾、今回の会議はマンネリ傾向に陥りがちな中堅教師のための会議であった。この種の会議は数年に一回開催されているとのことである。同協会は、教授法について大きな関心を抱いており教育熱心である。今回の会議の実行委員長であるローレン・ローベル教授 (Dean Lauren R. Robel インディアナ大学ロースクールのディーン) が、会議終了のまとめの挨拶で、「教育は sacred task であり、我々教師は sacred task に従事していることに誇りを持たなければならない。また学生を一人の人格者として敬意を持って接しなければならない。」と述べたが、その言葉に AALS の姿勢が集約されるかもしれない。

とはいうものの、会議場の外でコーヒーを飲みながら、ある高齢の教授は「大きなロースクールの中堅教授の年収がせいぜい 12 万ドルなのに、卒業後ニューヨークの大法律事務所に入ったばかりの 26 歳の若造の年収は何と 15 万ドルだぞ!」とほやく。それに対し、若手の教授は、「先生、昔と違って、ロースクールの授業料は年額 2 万 5000 ドル～3 万ドルと高額です。しかも生活費は別です。ですから、ほとんどの学生がローンを使わざるをえませんよ。ローン返済のため、できるだけ給料の高い大きな法律事務所に入ろうとするのはやむをえないでしょう。そのため 1 年次の段階で良い成績を取ってローレビューの編集委員になろうとするのは自然の成り行きです⁽⁵⁾。1 年次では、ソクラテスメソッドによる質問の集中砲火に死ぬほど不安と恐れを感じながら一生懸命勉強しますが^{(6) (7) (8)}、2 年次になると気が抜けて、また受講科目も少なくなるので退屈するのもやむをえないでしょう。『First, be scared to death.

(4) 毎年 6 月頃開催されている。詳しくは AALS のホームページを参照。

(5) 周知のとおり、スコット・テュローは「推定無罪」で一躍有名となったが、すでに 1977 年「ONE L」という作品を発表しており、その中でハーバード大学ロースクールの 1 年次の厳しい勉学生生活を自身の体験を踏まえながら小説風に描写している。

Then, be bored to death.』ですよ。」とやんわりと反論する。すると高齢の教授は、「2年次以降は実務リーガルクリニックの科目がたくさんある。真面目にリーガルクリニックをやれば、死ぬ程退屈なんて馬鹿なことは無い。」と再反論していた。

5. 日本では合格率の関係で新司法試験に合格することが事実上優先事項となっている。したがって1年次の段階で良い成績を取ろうとするインセンティブは少ない。また司法修習を終えて就職先を確保できるかどうかが最大の課題となっており、弁護士1年目の収入にこだわる余裕は無い。その意味で日本の法科大学院生は3年間比較的コンスタントに勉強に励まざるをえない環境に置かれていると言えよう。

以上

-
- (6) ハーバード大学ロースクールのソクラテスメソッドの歴史については、関西学院大学ロースクール「正義は教えられるか」（2006年3月31日関西学院大学出版会）所収のPeggy Cooper Davisの報告「米国における実験的法学教育」のうち107ページ～112ページが参考となる。
 - (7) カリキュラムなどについて3年間の調査検討の結果、2006年10月、ハーバード大学ロースクールはケースメソッド中心の教育方法から移行するため一年次のカリキュラムを大幅に改革した。同ロースクールのDean Elena Kaganによれば、100年ぶりの改革であり、“we are now making the most significant revisions to it since that time”と述べている。ハーバード大学ロースクールのホームページ参照。
 - (8) アメリカのロースクール教育の内容については様々な資料ないし本があるが、最近の状況をデータで簡潔にまとめたものとして、ダニエル・H・フット「データでみるアメリカのロースクール教育」（有斐閣ジュリスト2005年9月15日号の97ページ～103ページ所収）がある。